

本に長く住んでいるから」「ここは日本だから」と日本語使用に違和感はないようである。また大阪オンヌリ教会で初めて執事が任命されるときに行われた「執事任職礼拝」(二〇〇九年二月三十一日)や信徒総会(同年三月一日)もすべて日本語で行われた。在日大韓基督教会と異なり、韓国語へのこだわりは全く見られない。

四 おわりに

礼拝における日本語使用という点において両者には違いが見られた。この違いは両者が流入した社会的背景による。植民地支配下に流入した在日大韓基督教会は民族主義的な性格を形成し、宗主国と従属国という関係がない中で流入した韓国系キリスト教会は日韓の歴史的関係を抜きにして普遍主義的な性格でもって宣教を行う。出自は同じ韓国キリスト教でありながら大阪オンヌリ教会が大阪西成教会よりも日本人信者を獲得できているのは、徹底した日本語使用によると考えられる。

朝鮮学校教員家族における祖先祭祀

猪瀬 優理

本発表の課題は在日朝鮮人の家族における二〇〇〇年代初頭現在の祖先祭祀(以下「チェサ」と記す)の実施状況に見られる変容とその意味について考察することである。

チェサとは、朝鮮半島を中心として行われている亡くなった先祖に礼を捧げる儀式だが、本発表ではチェサの担い手として、朝鮮学校教員の家族に着目する。朝鮮学校は民族を重視する教育の場ではあるが、チェサは基本的には各家庭の祖先祭祀

儀礼であるため、チェサの実施の程度と朝鮮学校教員であることとの直接的な関わりはない。ただ、本発表では、チェサの実施を意識的に行う可能性が高い層として朝鮮学校教員家族を捉える。

従来、チェサは朝鮮民族の民族性の表象として捉えられており、民族的アイデンティティとチェサの関係を問う視点は重要である。しかし、本発表では、社会変動と祖先祭祀の変容との関係をみるため、家族像の変容という観点からチェサの変容を検討する。

東北・北海道地区および関東地区の朝鮮学校数校からの協力を得て、それぞれの学校に所属する複数の朝鮮学校教員からそれぞれの家族・親族の冠婚葬祭について、特にチェサを中心として聞き取りを行った。調査は二〇〇八年から二〇〇九年にかけて実施した。

全対象二二名のうち、二〇歳代が一名と半数を占め、五〇歳代は二名、六〇歳代は一名のみである。在日二世に当たる人が六名、三世に当たる人が十六名である。また、父方あるいは母方の既婚者の大部分が在日同胞と結婚している。

二二名の回答者のうち、家族・親族がチェサを実施していると回答したのは十八名であった。四名は家族・親族がチェサを実施していないと回答した。

聞き取り調査の結果から読み取れた具体的な変容は、旧暦ではなく西暦に変え、祀る先祖を限定して実施回数を減らし、供物の種類・量を減らす、複数の忌祭祀をまとめて行う、きょうだいが一年ごとに交代して行うなど、チェサの形式面の合理化

としてまとめられる。

また、儒教的祭祀であるチェサは民族性の象徴であると同時に、女性差別の象徴ともいえる側面があった。しかし、今回の聞き取りからは、儒教的家父長制に基づく家族像は、女性を含めた個人を尊重する家族像へと変容しているとみられる傾向も見出せた。

朝鮮学校教員家族によって実施されているチェサは単に祖先祭祀を通して民族的なルーツを意識する機会であるだけでなく、普段は顔を合わせることの少ない全国各地に散らばった親族が集合して故人の思い出や近況を語り合える場として認識されていた。朝鮮学校教員家族においてチェサは何らかの形で行われていた。それは引き継がれるというよりも、在日朝鮮人家族として新たに作り出されてきたチェサという側面があった。

朝鮮学校教員家族にとってチェサは、家族の結束を確認する場であり、かつ「朝鮮人」であることを確認する場であるといえる。また、チェサをそれぞれの事情に照らして変容させていく過程は、日本社会の中で自分たちの生活を守りながら、新たな家族を形成していく過程でもあると考えられる。

最後に、本調査の最終的な目的は、チェサに焦点をあてて在日朝鮮人家族の祖先祭祀のあり方と家族の現状を明らかにすることであった。しかし、本発表で示すことができたのは、朝鮮学校教員家族という限られた人々の状況である。今後は、異なった立場にある多様な在日朝鮮人家族のチェサの実情を明らかにすること、その全体像が見えてくるのではないかと考えている。

パネルの主旨とまとめ

櫻井 義秀

一 宗教文化のトランスナショナルリティ

昨今、グローバル化の進展と共に宗教文化の越境性(トランスナショナルリティ)が研究されてきている。移民・難民を含む国際的な労働力移動に加えて、世界宣教に力を注ぐ既成宗教・新宗教があり、さらにバーチャルなスピリチュアリティ空間の拡大によって、特定の地域的空間や民族・歴史的伝統に固有なものと考えられていた宗教文化が異文化圏へ浸透していつている。

本パネルでは、現在、発表者たちが進めている東アジアにおける宗教文化の動態調査のうち、この二、三〇年に限定した韓国と日本の宗教文化交流に焦点をしぼり、調査研究のあらましと知見の一部を報告した。

二 調査研究の経緯

本研究は、韓国側・日本側の研究者がほぼ一〇年間の共同作業において構築してきた調査研究の一部である。韓国側の調査は、東西大学教授李元範を中心とした韓国学術振興財団人文社会分野支援国内外地域研究助成「日韓宗教の相互実態に関する調査(二〇〇三―四)」日本大衆文化開放による日本系宗教の教勢および受容者の意識変容に関する調査(二〇〇四―五)による。日本側は櫻井義秀を中心として科学研究費基盤研究(B)(一)研究課題番号一六三二〇〇一〇「カルト問題と社会秩序―公共性の構築に関わる比較社会論的検討―(二〇〇四―六)」と萌芽研究(研究課題番号一九六五二〇〇六「日韓宗教文化の